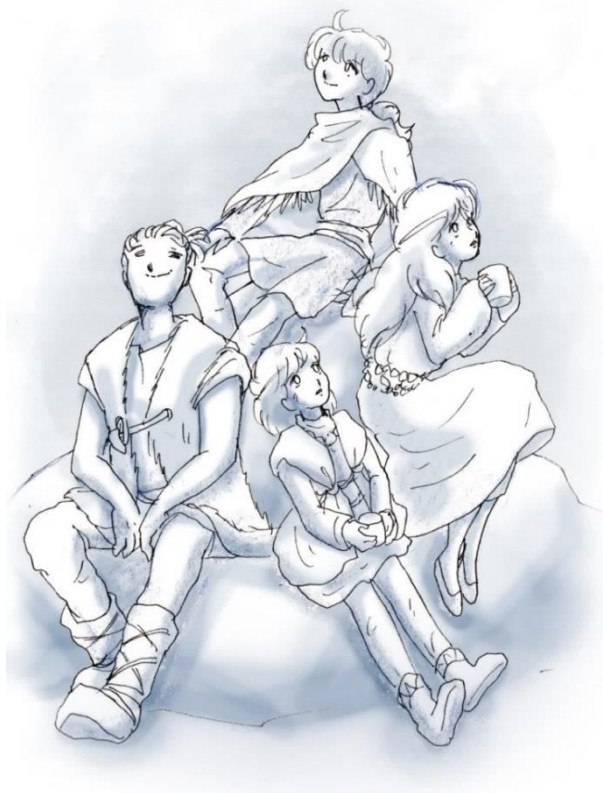


風の末裔シリーズ・2ndシーズンの1  
～白い森（寂しい天の川）～



この土地の夏は短い。短い夏に一斉に草が萌え立つ。

夏草色の馬に乗った蒼い髪の青年が、雲を縫って目的地へと急いでいた。

「ピンピンと跳ねた群青色のクセツ毛を首の後ろで束ね、墨で線を引いたような眉と目の縁取りも凛々しい、風の末裔の青年。

王都より北に位置する白い森が、長に指定された待ち合わせ場所なのだが、その手前の岩山に、手を振る二人の知った顔が見えた。

「ノスリ！ カワセミ！」

青年は馬を降下させた。

「どうした？ 集合はあの森だろう？」

「ああ、森へ行く前に、確認しておこうと思ってな」

蒼い髪を頭の天辺でぎゅっと束ねた、がっしりした青年が答える。三人ともまだ初々しさの残る成人一歩手前の年頃だが、ノスリと呼ばれたこの青年は、他の二人より頭ひとつ抜き出ている。

「確認……？」

「お前は何て言って長に呼ばれた？ ツバクロ」

ツバクロと呼ばれた青年は、少し困り顔をした。ノスリはどうも、主導権を取りたがる。

三人の中ではそれで構わないのだが、長の考えがある時は、素直に長に任せて流れに乗ってほしいのに……。

「鷹の手紙では、ただ、三人に用事があるから、白い森で待つように……っただけ」

「やっぱり、お前もそれだけか……」

ノスリは腕組みした。

「近くの湖に滞在していた俺達とはかく、遠く西南の山岳地帯に向向しているお前をわざわざ呼び戻して……」

「ノスリ……とにかく、長の指示通り森へ行こうよ」

「それがな、カワセミが……」

ノスリはさっきから黙っている小柄な青年の方を向いた。

カワセミは大きな目を上げて、ゆっくりした動作で、二人を交互に見た。

ノスリとは対称的に、この青年は手足も首も細く、本当に小鳥みたいだ。その細い首や手首に、色とりどりの石を繋げた鎖が重そうにザラザラと巻き付いている。身体は小さいのに、腰まで覆う水色の猫っ毛が爆発したみたいに広がって、頭だけアンバランスに大きく見える。

その小鳥みたいな青年が、ゆっくりゆっくり口を開いて、  
「……胸騒ぎがする……」と、ぼそりと呟いた。

「……………」

ツバクロも眉を寄せた。カワセミには少し予知っぽい能力がある。これは長にもない、珍しい力だ。

修行しているうちに段々に現れた。ノスリが、カワセミに一目置くのも、その為だ。

「さわさわする。誰か来るんだ。そいつ、破壊者だ。何かを壊す……」

「カワセミ!!」

ツバクロが遮った。

「君の『予感』が信頼出来る事は知っているよ。でも、会う前からそんな風に決めつけられる『誰か』の身にもなってやれ」

「……………」

カワセミは素直にうなずいた。

この能力が現れ始めた頃、気味悪がる周囲から庇ってくれて、周りと上手くやれるよう助けてくれたのも、ツバクロだった。

「何にしても、森へ行こう。カワセミの心配も、後で長に報告すればいい……だ……ろ……?……?!!」

ツバクロが、馬の方へ歩きかけて、妙な違和感に動きを止めた。馬が後ずさりして、悲鳴を上げて立ち上がった。

「……………」



ノスリとカワセミにも緊張が走った。ツバクロの影が、いきなりビュン！と長く伸びて地面からはがれ、見上げるばかりの黒虎となったのだ。

「なっ…何…??」

魔性の虎は赤い口を開き、咆哮を上げて立ち上がった。

あっけに取られるツバクロに振り降ろされる青電刀のような爪を、ノスリの二刀がガシッと受け止めた。

「カワセミ!! 呪文を寄せせ!!」

「ノスリィ!」

カワセミが、手の中にした光を、ノスリに向かって投げた。

ノスリの剣がそれを受け止め、翡翠色に光る破邪の剣となる。

一閃された剣から放たれた光が、虎を吹っ飛ばした。しかし

慌てて作った呪文は力が足りず、虎を倒すには至っていない

ガラガラと岩の塊を蹴とばし、しつこく立ち上がるうとする

虎に、横からツバクロがカマイタチを放った。

虎は図体からは想像できない身軽さでそれをかわし、離れた

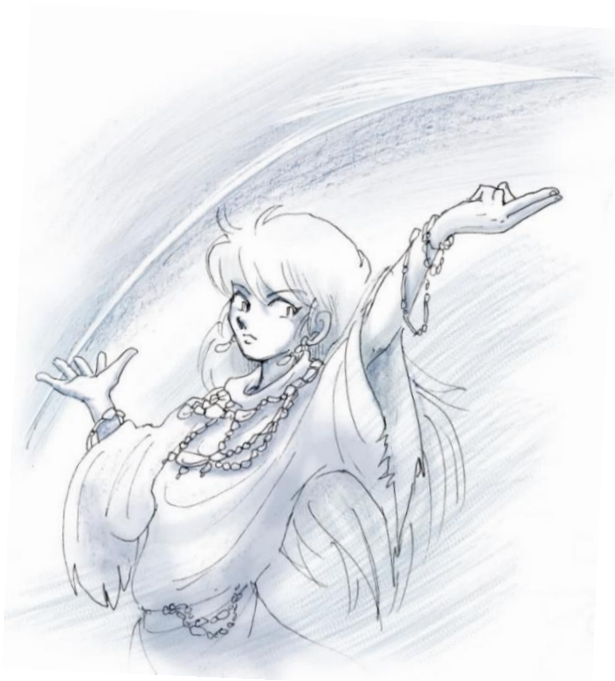
所へ大きく跳んで、三人に向き直って吼える。

「何てモノを連れて来たんだ、ツバクロ…」

カワセミが、状況とは裏腹に、無感情にぼそっと呟いた。

「ごめん！ 二、三日前に、山で祓い損ねた奴だ。姿が消えた





と思ったら、影の中に憑いていたなんて」

「迂闊だな… 蒼の長の一番弟子が、聞いて呆れるね」

カワセミが左手を高く掲げた。大地と風の気を集めて、緑に光る槍が出来上がる。

「そりゃっ!」

しかし、投げる力が全然ない。弧を描いて飛んだ槍は、虎の手前でふらふらと横に逸れた。

「このノーコン!!」

いつの間に、そちら側に回り込んでいた俊足のツバクロが、逸れた槍を剣で打った。槍は虎に向かって一直線に飛び、見事その片眼に突き刺さった。

「予知していたさ、キミがそこに来る事をね」

虎は怒り狂って、滅茶滅茶に暴れた。口と鼻から気炎を吐き出し、棍棒のような尻尾を振り回す。

「こうなる事も予知してたかあ?!」

ノスリが飛んで来る尻尾を飛び越えながら、反射神経は皆無なかワセミを抱えて逃げた。

「ボクだって万全じゃない!」

カワセミは抱えられながら、ぼそぼそと言いつつ訳した。

「お前の言っていた、何かを壊す者ってこいつか?」

「…違う…多分…」

「はっきりしろよ!!」

ノスリは更にカワセミを抱えたまま、虎の突進を避けて、横へ跳んだ。

不意に虎が止まった。残った片眼が、岩山の下の森を見据えている。

…と思ったら、三人に見向きもせず、いきなり四足よつあしで岩山を駆け下り出した。

「え? 何?」

「やばい!! あんな所に!!」

虎の目指す森の入り口に、人間の子供が見えた。

人間にはあの虎が見えているかどうかも怪しいが、虎は充分人間を引き裂く力を持っている。

カワセミが槍を作り、ノスリとツバクロが最速で虎を追い掛ける。

しかし次の瞬間、思いも寄らない事が起こった。

子供は虎にしっかりと視線を向け、おもむろに腰の剣を抜いた。小さい体に不釣り合いな、でっかい剣。その剣は抜いた瞬間、溢れんばかりの光を湛えていた。

「——破——邪——!!」

叫ぶと同時に振り上げられた剣から、破邪の光が湾曲して延び、虎を包んだ。

翡翠色の光に絡め取られた黒虎は、しばらくもがいていたが、だんだんに小さくなって、空中に消えた。

三人は岩山の中腹で止まっていた。

「……倒すんじゃなく……異次元に飛ばした…?」

カワセミが、かすれた声で呟いた。

子供はスタスタと岩山を登って来た。

「なんだ…こいつ…」

ノスリが無遠慮に言った。

子供…十三歳位の…は、確かに人間なのだが、燃えるような真っ赤な髪をして、瞳は夜行動物のようにランラン輝いていた。

「君……」

何者なの?…と聞く前に、子供が先に口を開いた。

「『蒼の長の一番弟子』ってあんた達?」

開いた口許の犬歯は、人間にしてはやけに大きい。

「ああ、そつだが…お前は?」

言いかけるノスリの鼻先に、子供は蟬封された手紙を突き付けた。

「蒼の長が、渡せて」



人間の子供をメッセンジャーに？ 三人はいぶかりながら、手紙を開いて覗き込んだ。覗き込んだ眼が見開かれ、口をホカんと空けて、もう一度子供を凝視した。

「で、弟子入り?! 蒼の長が、人間を弟子に取るだってえ?!」

\*\*\*

《この手紙を持参した子供を、弟子として、預かることになりました。人間だけれど風が使えちゃいます。放っておくと危ないですからね。心構えを教えて、蒼の里に連れて来てあげてください。》

P・S みんな、仲良くね♪ 《

「おい、本当に長の書いた物か？ 蒼の長が人間なんかを弟子に取る訳ないだろ!!」

ノスリが思わず叫んだ。

「人間『なんか』で悪かったな!」

子供が背伸びしてノスリを睨む。

ツバクロが慌てて取りなした。

「さて、落ち着いて、…まずは名乗り会おう。僕は、ツバクロ、こっちはノスリ、それとカワセ。君の名前は?」

「……名前つてのは、自分で名乗るモンだつて、長に教わんなかったのか？」

「……ノスリだ」

ノスリは淡々従った。まだこいつの正体が分からない、用心しておこう…、という所だ。

「…カワセミ」

赤毛の子供はまだ目を光らせながら三人を見据えている。

「僕達は名乗ったよ。君の名前は？」

「わりい、長に止められている」

「なんだそりゃ!!」

ノスリが子供の前に迫って、胸ぐらを掴もうとした。

「そうじゃなくてさ」

子供は一瞬でノスリの前から消えて、後ろから声が出た。

「俺、これから蒼の一族に弟子入りすんだ。それには人間の名前を背負って来ちゃ駄目なんだつてさ。だから、あんたらに名前を付けて貰えって」

「弟子入りなんざ、まだ認めてねえー」

再び詰め寄ろうとするノスリを、ツバク口が制した。

「待って、待って！ ねえ、君、今、何て？」

「だから弟子入り…」

「その後！」

「あんたらに名前、付けて貰えって…蒼の長が」

「!!」

三人は弾かれたように目を見開いた。名前を授けるのは、簡単な事じゃない。その言葉ごとたまによつて、その者の人生が定まる。蒼の里では、長の重要な役割なのだ。

「ねえ、君、…君の聞き間違いじゃないかな？ 僕達、長の子だけれど、名前を授けるような立場じゃない」

赤毛の子供は目をそらして地面を向いた。

「そりゃ、俺だつて長に付けて貰いたかつたさ」

石をひとつポンと蹴る。

「でもさ、あんた達の記念すべき命名第一号になつてやれって」

「……」

「これってどっちが名乗なんだ？ あんた達に名前を付けられる俺か？ 俺に名前を付けるあんた達か？」

三人とも降って湧いた責任に、黙ってしまった。名前を授けるつてのは、付ける側、付けられる側、どちらかの失態がどちらかの不名誉に繋がる。お互いの信頼関係が必要な、大切な事なのだ。

「ねえ君、名前つたつて、僕等、君の事まだ何にも分からない。」



少し行動を共にしてから、ちゃんと考える。それでいい?」

ツバクロが何とか収めた。

「いいぜえ」

「おい、こいつ、口の聞き方から仕込んだ方がいんじゃないか?」

不機嫌なノスリをなだめながら、ツバクロは肝心な事を聞いた。

「・にしても、人間が蒼の一族に弟子入りなんて。君、一体ナ

ニモノなの?」

「…長は何て言ってるんだあ?」

「人間だけれど風が使える。危ないから預かって教育する…、

へらいしか」

ノスリがぶっきらぼうに手紙の内容を伝えた。

「じゃあ、そういう事だぜえ」

「何だよ、それ!!」

また掴みかかるノスリを子供はヒュンと避ける。しかし避けた先の正面にはツバクロがいた。風を読むのは彼の得意技だ。

「君、まず、口の聞き方、ちゃんとしなさい。しなくてもいいケンカ、する事になるよ」

「…分かったよ。だけど、人間だどつだって、こだわられると

思わなかった。蒼の長の一番弟子だって言うから、今日会えるの、楽しみにしていたのに…」

「……………」

ノスリが罰悪そうに黙った。人間に蒼の一族の名前を授けて弟子入りさせるなんて、認めたくないが、このままじゃ長の名に泥を塗ってしまう。

「悪かった…」

ツバクロが何か言う前に、カワセミがぼそりと言った。

「でも、キミを両手を広げて歓迎するかどうかは別だよ…」

ノスリも同意だと言っ顔をして、子供を見据える。

「いいぜ! 人間だからとかじゃなく、俺自身が気に入らないってんなら、納得行くもん。文句があるなら直に言え」

だがしかし、気に入られようと媚びるつもりは毛頭ないって態度を前面に押し出して、子供は胸をそらせた。

三人はくやしければ、この子供のペースに押され気味だった。いったい何処の子供なんだ?」

ともあれ、全ては蒼の里の長の元へ行ってからだ。長に聞けば、三人に納得の行く説明してくれるだろう。

「おい赤毛、お前、馬は? 歩いて来たのか?」

「乗って来たけれど、借りモノだ。帰さなきゃ。あんた達の誰

か、二人乗りして連れてってよ」

「連れて行って下さいだ…よ…」

ツバクロがだしなめかけて、森の入り口に目が釘付けになった。そこから岩山を一気に駆け上がって来た馬は、蒼の里でもついで見ない、見事な草の馬だった。

草の馬はほぼ一生、一人の主に就く。主の成長と共に成長する。主が力を得るほどに精気をまとい、主より長く生きる馬もいる。

子供に駆け寄って鼻面をすり寄せる馬は、昨日今日鍛えられた物ではない、刻み付けられたオーラがあった。借りモノと言ったが、いったい誰の馬なんだ？

「おい、お前!!」

ノスリがまた絡みだした。

「そんな馬見せ付けて、俺達の上に立つつもりだろうが、それは浅はかっただけだ。その馬の価値は、その馬の持ち主のものだからな」

「…」

赤毛の子供はキョンとした顔でノスリを見た。

「ああ、そうだろうな… だけど、そんなにスコイのか？ この馬？」

何の下心もなく言っているようでノスリも空振りした感じだ。

「俺、ちっちゃい時からコイツしか知らないから。ふうん、スコイのか…」

子供は馬の鼻面をなでながら、素直に驚いている。

「ねえ、ボク、その馬に触ってもいい？」

珍しくカワセミが進み出た。ノスリの目が光る。

「いいよ、俺と話してる奴なら、こいつ、怒らない」

「あ、それは……」

ツバクロは止めようか躊躇した。カワセミは『モノ』に触れるだけで持ち主の情報を得る事が出来る。フェアじゃないのは分かっているが、ツバクロだったこの馬の主を知りたい誘惑を止められなかった。

\*\*\*

カワセミが赤毛の子供の馬に近付き、首筋に手を当てた。ノスリとツバクロは、黙って唾を呑み込んでいる。

「……あれ？」

「どうしたの？ 何か変？」

「…いや、…きれいな毛並みだ…」

「サンキュ、ねえ、もう帰していい？ あのヒト、馬がいなきや困る場所に住んでんだ」

「あ、ああ…」

鎧(あぶみ)を結わえて手綱を外し、お尻をほんと叩くと、馬は田を描きながら上昇し、雲の上に消えた。帰る方向を悟らせないように、普段からそうつ風にな込まれているんだろう。子供はツバクロが乗せて行く事になり、鞍の設え等を直している間に、ノスリはカワセミにすり寄った。

「どうだった？ 誰の馬なんだ？」

「分からなかった」

「どうして？」

「防御…馬自体、強い術で守られている。ボク、そういう術はソコソコ破れる自信あるんだけど…ピクともしなかった」

「お前でもか？」

「……………」

カワセミは唇を噛んだ。自分の術は長に一番近い、と自負していただけに、えも言えない不安に襲われた。

何にしても、長の元へ戻るまでの辛抱だ。自分が懇願すれば、あのヒトはきつと何でも教えてくれる。そしたらスッキりするし、彼の事は長が引き受けてくれるだろう。

厄介事はごめんだ。自分の心を乱す事もごめんだ。

「おーい、ちょっと待って」

不安の元凶の子供が、何かを見つけて声を上げる。まさに飛び立とうとする所だったので、三人は氣勢を削がれた。

赤毛の子供の指差す空の黒い点がみるみる大きくなり、鷹の姿になってツバクロの腕に降りた。

「長からだ…」

手紙を開いて、頭を付き合わせた三人は、みるみる顔色が変わり、眉間に縦線が入った。

「ぶ〜ん」

後ろから子供が覗き込んでいるのに、三人同時にびっくり目で振り向いた。人間の文字とは違う筈だが。

「読めるのか?！」

「一応…」

子供は両手を頭の後ろで組み、息を吐いた。

「しょうがないなあ。まああのヒト、いっつも忙しげだもんね」  
そして岩山を二・三步駆け下りた。

「野営なら森だろ。さつき、風穴が一杯ある場所があったんだ」  
さっさと駆け降りて行く子供を、三人は茫然と眺めていた。

《北方に急用が出来たので、急遽出掛けます。さすがに、自分の留守に人間を着る里に入れる訳には行かないので、二・三日

その子供と其処まで待機して下さいね。

追って、鷹で連絡します。

P・S・S「メソネ」

「おおい」

森の入り口で手を振り呼び子供に、三人は溜め息を付き、ノスリが馬を引いて歩き出した。

遅れて歩くツバクロの横に カワセミが来る。

「あのヒト…時々、こーゆーコト、やるよね…」

ツバクロも苦笑いで返した。

「見え透いてるよね…」

でも、僕達三人と、あの子供と、一緒にして…、長は、何がしたいんだろう？

僕達三人はいずれ、蒼の長を継ぐ。はっきり決められた訳じゃないが、里でも皆、その心つもりなのだ。

今の長の力には遠く及ばないが、カワセミの術、ノスリの剣技、自分の知識と風読み、三人で補い合えばやって行ける。

里に能力者が不足してる今、それが一番ベストな筈。今の状態でどこもいじらなくて、丁度のバランスなんだ。

それだけに、あの子供の出現が、変な波風みたいで…。ヒト

より余分に気の回る青年は、ざわざわする不安を感じていた。

「おい、赤毛！」

焚き火を囲んで、一番大きい肉に手を伸ばそうとする子供に、またまたノスリが噛みついた。

「食べるにも、作法ってモンがあるんだ。まず目の者から」

「……………」

子供は素直に手を引つ込めた。

「殊勝じゃないか」

ノスリがニンマリしてその肉に手を伸ばす。

「何でも教わって来いって言われたんだ。何気ない日常に色んな意味があるって」

ノスリはお祈り前にかじろうとした口を、慌てて止めた。

「誰に言われたの？ 長？」

「ううん、あの馬の持ち主…」

「……………」

ツバクロがちよっとかしまって、命あつた食物への感謝の祈りを唱えた。毎日やってた訳じゃないが、この子という間は、やる羽目になりそうだ。

二人も復唱し、子供もたとごとしく、真面目に真似をする。

「どうやら『ふり』ではなく、学びたい気持ちは本物のようだ。

「黒虎を捕えて異次元に飛ばした技も、そのヒトに習ったのか？ そのヒト、長のどういいう知り合い？」

ツバクロが焚き火の薪を組み直しながら尋ねた。

「ん……」

しかし子供はそこで口を閉じてしまった。他の二人はあからさまに不満顔になる。

「ボク、肉はいいよ」

カワセミは肉に手を付けず、自分の分をノスリに促した。

「五穀断ちしているんだ。なかなか新しい術が入らなくて……」

「へえ！」

子供は興味一杯にカワセミを覗き込んだ。

「術が入るってどんな感じ？ 肉を食べないとそうなるの？」

「……………!!」

カワセミは露骨に嫌な顔をした。ノスリが肉を噛み千切りながら、割って入る。

「人間には関係のない事だ。お前さん、ちょっとは技が使えろよ。ようだが、カワセミの術は全く別のモノだ。物事の真実を見抜き、この世界の流れを見据える。蒼の長の真骨頂って力だ」

カワセミの能力は、他の二人のちょっとした誇りだ。

しかし子供はノスリを飛び越し、いきなりカワセミの両手を掴んだ。

「教えて!!」

「…ナニ……？」

「それこそ俺の求めるモンだ!! 物事の真実を見抜き、世界の流れを読む、そんな大きな目が欲しいんだ!!」

「放してよ……」

カワセミは冷静にその手を振り払って立ち上がった。

「ボク、日課の修練して来なくちゃ。その子が覗きに来ないよ、見ていてよ。気が散るから……」

不機嫌極まりないって風に、水色の髪を振って、森の奥へ行ってしまった。

「気まずい空気になる。」

「俺…イケなかった…？」

ノスリが何か言っ前に、ツバクロが噛んで含めるように教えた。

「物事を知ろうとする気持ちは悪い事じゃない。でも、苦労して会得した物を、軽く扱われると、自分の人生その物を否定された気分になる。君だってそういう経験、あるだろう？」

「……………」

子供は健気に受け止めて、うなずいた。

「俺、カワセミを傷つけちゃった。謝らなきゃ」

この子供が、意外に素直に反省したので、ノスリも怒っていた顔を少し緩めた。

「今は止めとけ。修練中はヒリヒリしているからな。明日の朝にしろ。朝イチのぼおっとしていた時が、あいつ、一番寛容だ」  
それから、カワセミから譲られた肉を、半分裂いて、子供にくれてやった。

「なあ、お前さん、何をそんな急ぐんだ？ 長の元へ行ってからでもいいじゃないか」

「そうだね、つい…。でも、俺、本当、時間、ないんだ」

\*\*\*

「来月には、行かなきゃなんないんだ」

「来月？」

もう、月半ばだ。弟子入りと言っても、そんなに短期間なん  
てっ。

「おい、お前、腰掛けで来る気なのか？」

「だって遠征に出るんだ。戦場に行くんだ」

「え…？」

二人の青年は顔を見合わせた。

「お前さん、子供じゃないか。何処の世界に、お前さんみたいな子供を兵隊にとる軍隊がある？」

子供は口をつぐんだ。しかし嘘を言っている風でもない。  
少し置いて、ツバクロが子供の肩に触れて、ゆっくりと言っ  
た。

「分かったよ。君も、どこまで僕等に打ち明けていいのかわからないんだろう？ でも、僕達、君の事、知っておいた方がいいと思う。でないと、いつまでも平行線だ。答えられる事だけでいいから、なるべく答えてくれる？ 急に黙ったりはなしにしようよ。その代わり、僕達で答えられる事は君の質問にも答えてあげる。どっちみち君の事が解らないと、名前だって付けようがな」

ツバクロはこうやって、ゆっくりヒトの心を解ほぐすのが本当に巧い。口より先に手が出るノスリと、人見知りチャンピオンのカワセミには、不可欠な存在だ。

「そうだぞ、あんまり生意気だと、恥ずかしい名前を付けてやるぞ」

頭を小突くノスリに、子供は顔を上げて、少し解れた顔になった。

「ノスリさん、知らないのかい？ 名前ってのは、本人よりも

周りの者が使うんだ。恥ずかしい思いをするのは、ノスリさん達だよ」

ノスリは鳩が豆鉄砲喰らった顔になり、ツバクロは笑った。

「一本取られたな。今のはノスリの負けだ」

気が付けば子供の生意気な言葉遣いは消えていた。

人間だからと拒絶する相手に、精一杯虚勢を張って抵抗していただろう。こちらでも反省すべき事だった。

少しづつ話をし、子供の身の上を見せて来た。どうやら、何処か、身分ある将軍の子息らしい。戦場へ行くといっても、一兵卒ではなく、父に着いて戦という物を学びに行く。

「一度戦場に出ると、もう、子供でいられない。戦が、ヒトをモノを世界を、どう動かして変えて行くか。大きい流れを見られる目を持って、行かなきゃ、と思ったんだ」

それで、人を介して、蒼の長に学びを求めたのだという。

「ふうん、お前、ただの生力キじゃなかったんだな。なかなか立派な心掛けじゃないか。おう、俺らは『さん』付けてなくていいぞ。学び仲間なら敬称は要らん。な、ツバクロ」

ノスリは根が熱血なだけに、この子の一生懸命な所は気に入ったみたいだ。まあ、蒼の長が受け入れたんだから、半端な子供じゃないとは思っていた。

「俺も、聞いていい？」

「ああ、だけど、お前の知りたい事はやっぱりカワセミの管轄かもな」

「いや、…蒼の里の掟について…」

意外な話題に二人は顔を見合わせた。

「蒼の里の掟って、いろいろ厳しいって聞いたんだけど…」

「？ ああ、…まあ、そうかな？」

「例えば、その…一族の者が、蒼の里を出奔する…って、あるの？ それは、重い罪なの？」

「…っ？」

二人はまた顔を見合わせた。

「…あの馬の持ち主、君を長に紹介してくれたヒト、里を出奔したヒトなの？」

「……………」

「ダンマリはしない約束だよ」

「ごめん、今聞いた事、長に迷惑が及ぶ事だったら、忘れて！」

ああ、それを心配していたのか。

「大丈夫だ。出奔した者と交流があったって、どうって事は無い。その程度で『こちゃこちゃ』言っ奴はいない」

ノスリが豪快に答えてくれた。

「出奔は全く例がない訳ではない。いけない事だが、罪ではない。責は負うがな」

「責めて……」

「まあ基本的に、蒼の里には戻れない。一族の一員としての存在を抹消される。里の者から会いに行く分には制限はないが、存在を抹消された者と関わろうとする者は、あまりおらん……。おい？ どうした？」

子供はいきなり立ち上がって、寢床の洞穴に歩き出した。

「おい……」

「もう、寝る……」

「おい、君……」

ツバクロも立ち上がって、子供の手首を掴んだ。

「言っただろう。ヒトが質問に答えているのに……!!」

びっくりのした。赤毛の男の子は下を向いたと思ったら、足元

にはたはたと涙が落ちたのだ。

「……何でもない、……何でもないよ……」

まるで幼い子供だ。いや、よく見ると、大人びた事を言っていたが、まだ感情を抑えられない、……子供なのだ。

それに先に気付いたノスリが、子供の頭を抱き抱えた。

「どうした、どうした？ いきなりホームシックか？」

「ダンマリはなしだよ」

ツバクロも優しい口調になった。

「…………から……」

「えっ」

「……だから、……あのヒト、……いつも、寂しそうだったんだ……。長がいても、俺がいても……故郷で『いないヒト』になっただなんて……」

「…………」

二人とも何も言えなくなっ、その場で止まってしまった。

こんなにも明け透けにヒトを思いやる子供。自分達は何を身構えていたんだろう。

「人間の俺の方が、あのヒトより先に寿命が終わるんだ。あのヒトを見る事の出来る人間は、とっても少ない。みんな寿命が来てしまったら……狼……ひとりぼっちだ……」

子供は少し落ち着くと、素直に喋り出した。むしろ、ずっと胸に溜めていた物が、押し出されたんだろう。

「ああ……」

ノスリが子供の頭を撫でてやりながら、上を見た。



「その、…狼…ってヒト？ ひとのほっちになっちまわないように、俺が考えてやるつか？」

「……………」

子供は銀の目の光を涙で乱反射させて、ノスリを見上げた。

「俺らが長を継いだ暁には、特権強行して、狼ってヒト、特赦しちまえばいい」

「ノスリ……それが出来るんなら、今の長がやっているよ…」

ツバクロはノスリの豪快な言いようは好きだったが、さすがに賛同する訳に行かなかった。

「掟は蒼の里に生きる者達の礎いしすえだから、長だからって、そうそう崩せる物ではない。んー…そうだな、僕達が君を紹介して、その狼ってヒトと知り合いになれるかな？ そうしたら、そのヒトの寂しいのが、少しは減るかもしれない」

「そりゃナイスなアイデアだぜ」

ノスリが二人の頭を一緒に抱えた。

「あのスongoイ馬の持ち主だもんなー！」

彼の目的が別の所に行ってしまったているのが分かったが、子供が勢いに庄されて涙が止まったので、ツバクロも笑って済ませた。

\*\*\*

ちょっとは打ち解けられたかな…と思いかけた時、…不意に、奥の木立がザワついた。

「?!?!」

次いで、夜行性ではない筈の鳥達が、一斉に飛び立った。

「何?!」

三人同時に異変に気付いた。

「森の奥だ!」

三人、剣を挿んで駆け出す。

「カワセミ!」

森の奥の、少し広くなった所に最初に飛び込んだのは、俊足のツバクロだった。

「カ、カワセミ——!!」

さっきの黒虎が、真っ赤な口を開けて、中央の魔方阵に覆い被さっている。魔方阵にはカワセミが結界を張って、光の槍を必死で掲げて、虎の爪を防いでいた。

「遅いよ…!」

虎の見えない片眼の側から、ツバクロがカマイタチを放って、爪の前腕を弾いた。

「カワセミ! 呪文を寄越せ!」

ノスリも両手に剣を持ち、反対側へ虎を引き付ける。しかしカワセミは動かない。

「カワセミ……?!」

少し遅れて子供が駆け込んで来た。

黒虎は子供を見咎めるや、三人に見向きもせず、五本の爪を振り上げてそちらへ向かって行った。

「あぶな……?!」

助けに行こうとするツバクロの身体が、目に見えない風に遮られられた。

「……?!?!」

カワセミが、魔方陣の中にすっと立って、冷静に子供を見据えている。

「お手並み……拝見……!」

「カワセミ!!」

しかし子供は先程と違った。お手本通りの宣詞を唱えたが、さっきの魔力には遠く及ばない。抜刀した剣は、とても虎をどうこう出来る物ではなかった。

「カワセミ……離せ!」

ツバクロが叫ぶより、カワセミは先に反応した。魔方陣からスッと消え、子供と虎の間、虎の真ん前に移動した。そして一

瞬で呪文を唱えて壁を作った。

いきなり張られた結界に、虎は真正面からぶつかって、ドスンとしりもちを付いた。

「ノスリ、頼んだ!」

ようやくカワセミから術を買ったノスリの剣が、虎の脳天を真っ二つにして捕った。黒虎は咆哮を上げて、カサカサに崩れた。

「……?!?!手応えがなさ過ぎる?!」

「カワセミ……! どういうつもりだっ?!」

ツバクロが剣を収めながら詰め寄った。しかしカワセミは、何も言えずにペタリと下手り込んでしまった。

強い術をいっぺんに使う羽目になって、身体がオーバーヒートしてしまっただのだ。それでも息切れしながら青い顔で、茫然と固まっている子供を、マジマジと見上げる。

「何で? キミの呪文? ……素人レベル!」

ノスリがフラフラのカワセミをおびっして、四人、焚き火に戻った。

「こいつから召喚した、分身だよ。本体より遥かに力は劣る!」  
カワセミは、懐の小袋から、黒い剛毛を取り出した。

「風間、拾っておいた。長に報告しようかね」

ツバクロに渡された濡れ手拭いで額を冷やししながら、片目で子供を見やりながら、シレッと言っ。

「もういっぺん、キミの技を見たかったのさ…」

「無茶苦茶すんなよ!! 何かあったらどうするつもりだったんだっ?!!」

ツバクロが本気で怒った声を上げた。

「怒らないでよ。体毛から作った分身じゃ、大した力はないって。それに、責任取ってこんな目に遭ったでしょ。…うう……」

アタマイタイ……」

カワセミはそのままノスリにもたれて、丸くなってしまった。

子供は怒るタイミングなんだろうけれど、何だか怒り損ねて、所在なく説明を始めた。

「風間の最初の一太刀、あれは俺の力じゃないよ。狼が、俺の剣に術を込めてくれているの。だから、最初の一撃だけ狼と同じ術が使えるけれど、俺自身の力は、人間に毛の生えた程度だと思っよ」

カワセミが目を丸くして思わず起き上がった。額から濡れ手拭いが滑り落ちる。

「術を…え? 手弁当のように持たせる事が出来るの? キミ

の、その…狼…!」

「??? うん、だって、長も出来るでしょ?」

「長しベル『しか』出来ないよ!!」

いきなり起き上がったので貧血を起こして後ろに倒れそつになつたのを、ノスリが支えた。

「カワセミ、お前今日はもう休め。そんな体調でそんなに興奮してたら、血管ぶちぎれるぞ」

ノスリは純粹に相棒を心配する。

「……うん……」

だからカワセミも、相当頭に血が昇っている時でも、ノスリの言う事には素直に従う。

ノスリはカワセミを支え、子供を伴って洞穴に引っ込んだ。

見張り役のツバクロは、焚き火をかき混ぜながら、風間の出来事を反芻していた。

術はヒトのモノでも、それを受け取り、自分の剣に乗せて使うのは、並の者じゃ出来ない。ノスリだって相当な修練を積んだのだ。

けして、人間に毛の生えた程度では出来ない。あの子は自分の力の程を、理解しているんだろうか?」

長はあの子を更に鍛えて、どうするつもりなんだろう？ カワセミの言っていた予知…この子が、何かを壊す…。

…胸のざわざわが大きくなって来るのを感じながら、ツバク口は焚き火に枝を放り込んだ。

.....

「母さん!! ..かあさ——ん!!!」

子供の叫び声で、ウトウトしていたのを破られた。

洞穴を覗くと、ノスリとカワセミも起こされて、迷惑そうに子供をジト見している。子供は半身起こして、自分の肩を抱いて、カタカタ震えている。

「寝ぼけたの?」

「まったく…ママのおっぱいが恋しいかあ?」

しかし、子供の震えが止まらないので、ちょっと心配になった。

「…世話の焼ける……」

カワセミが子供の肩を押して仰向けに転がし、額に手を当てた。その手が微かに光る。

「キミの頭の中なんて覗かないから、安心しろ」

「……………」

子供はなすがまま目をしばたいてたが、やがて落ち着いてト

ロンとなった。

「悪い夢でも見たのか?」

「母さんが…黒虎の爪にかかる夢…」

ノスリとツバク口は真剣な顔をしてカワセミを見た。

「…予知夢…を、見た事は?」

「ない……」

「じゃあ大丈夫だ。黒虎と闘った後だから神経が昂たかぶっているだけ。大丈夫だ……」

「じゃあちゅう見るんだ、そういう夢。母さんが戦場へ行っている時なんか、特に……」

「キミの母親が、戦場へ?」

「うん、…戦士なんだ。めちゃめちゃ強い。強すぎて、誰も守ってくれないんだ。俺が早く大人になって、もっと…もっと、強くなって、戦場へ出て…母さんを護るんだ……」

「そうだな、守れるといいな」

「…うん……」

子供は口を少し開けたまま、静かに寝息を立て出した。ツバク口が毛布を被せてやる。

「カワセミ、ありがと……」

カワセミは何も言わず、溜め息を吐いて、横になった。

「焚き火番、変わるうか?」

ノスリが起き出して、ツバクロの横に来た。

「何だか大変なガキだな。だけど、やっぱり、ガキだ……」

「ああ……」

\*\*\*

カワセミはあまり丈夫じゃない。だから夜営の時はだいたいのスリとツバクロ、二人交代で見張りに立つ。そのつもりでいたら、夜半に子供が起き出して来た。

「焚き火番、代わるよ」

ツバクロは今しがたノスリと交代した所だった。

「君はいいよ」

「特別扱いしなくていい」

「…そうじゃなくて、子供一人に番させて、大人三人寝コケている図なんて、何か、カッコ悪いじゃないか?」

子供は真面目に考えて、ああ…そうかも…と、笑った。

「もう悪い夢は見ないか?」

「うん、ごめん、騒がして。もう大丈夫。カワセミのお陰。あのヒトの手、暖かいよ。随分無茶もするヒトだけれど」

「基本、良い奴だよ」

「うん」

こうしていると、素直で、普通の子供なんだが。

「大人になって、お母さんを守りたいって言っていたな」

「そんな事言った? あちゃあ〜っ」

「恥ずかしい事じゃない。それで、早く一人前になりたいんだ?」

「うん…、この間、ずっと母さんを護っていた守護が、外れたんだ。次に戦場へ行くの、心配で居ても立ってもいられない。

まだ早いって言われたけれど、親父に頼んで、連れて行って貰う事にしたんだ」

「…そうか…」

それで、あんなに急いでいたのか。

そう言えば、自分もこの位の年頃…早く長の助けになりたいと、気ばかり焦っていたっけ…。

結局子供はそのまま焚き火の側で寝てしまった。朝起きると、横はノスリに代わっていた。

「お早う、ガキンチョ、よく眠れたか?」

ツバクロが落ち枝を抱えて、木立を潜って出て来た。

「君、水汲んで来て」

「うん、カワセミは?」

「とっくに出掛けた。朝の修練」

「カワセミにいったい用事があるんだ。まず謝らなきゃ。そんなお礼も言わなきゃ」

「どうもいごよ」

カワセミが上半身裸で森の奥から現れた。襖(みそぎ)をしていたらしく、長い髪から雫が落ちる。術を使う為に、ありとあらゆる俗を削ぎ落とす…という感じの身体をしている。

「お礼くらい言わせてやれよ」

「昨日でかした事と相殺してくれたら助かる。あと、頼みがある」

ノスリとツバクロは顔を見合せた。どついう風の吹き回しだっ。

「うん！ 俺に出来る事？」

子供は張り切って答えた。

「狼…に、会わせて欲しい。キミに昨日の術を持たせたヒト」

それは他の二人も願っていた事だった。この子の昨日の話の感じから、二つ返事で事は進むと思われた。

しかし子供は、眉を寄せて、うつむいてしまった。

「どうしたのお？ 勿体つけてるのお？」

カワセミは焚き火の側に座り込んで髪を乾かしながら、子供を睨み上げた。

「そうじゃないよ。狼は…」

「ボク達みたいな小者には会ってられないって？ 孤高の賢者サマなんだ？」

子供は目を伏せて困った感じでうつむいた。

ツバクロもノスリもちょっとびっくりした。カワセミがこんなに他人に絡むのは初めて見る。よっぽど昨日からブライドをかきむしられているんだな…

しかし、挑発は子供を素通りした。

「逆だよ。あのヒト、自分を低く見てんの」

「へえ…??」

カワセミは顔を上げた。どれだけ水を浴びていたのか、まだ唇が紫だ。

「蒼の里を出た事を凄く罪に感じてんだ。多分、自分は里の者と会う資格なんかない…って思ってる。長に会うようになったのも、里を出て十年も経ってからだだった。長にも、いっつも気を使って。とても気楽に会える感じじゃない…」

あんな馬の持ち主がそんなに気弱だなんて？ カワセミも拍子抜けしたようだ。

「そりゃ、俺の兄弟子だって言えば、会ってくれはするよ。でも、きっとお互いただ気まずくなるだけだと思っ…」

「……………」

カワセミも黙った。これは突っ込みようがない。

好奇心だけで会おうとしたこちらと、お互いの気持ちを考え、良い出逢いにしたいと想うこの子の違いだ。

「ごめんね、カワセミ、何か他の頼み事、考えといて」

子供はそう言っって、水筒を持って、水場へ駆けて行った。

三人はしんとしたが、何かウヤムヤしている。今の子供の話で、逆に余計に狼に興味が湧いてしまった。凄い馬を持っていて、長に匹敵する術者で、気弱で、寂しいヒト…。

「よし！ こういうのはどうだ？」

ノスリが薪をぶちこんで焚き火を大きくしながら、静寂を破った。

「かじこまって紹介しようとするから、難しくなる。ナチュラルくに、出逢える感じを、演出するんだ！」

「はあ…」

ツバクロは目をパチクリさせ、カワセミがやっと乾いた身体に上衣をまといながら突っ込んだ。

「あの子が何かに襲われている所をボク達が助けるなんて、ベタベタなのはヤメてね…」

「何故分かる?!」

二人とも噴き出した。

「おし！ ここはお前に任せた!!」

いきなり肩をポンと叩かれて、ツバクロは目をぱちくりさせた。

「え？ え？ 僕？」

「頭を使うのはお前の分だ」

「丸投げかよお!!」

子供が水を抱えて戻り、その話は一時中断した。

朝食の熱物(あつもの)を流し込んで、しばらく空を見ていたが、鷹の来る気配はない。

「二、三日ってあったから、今日は来ないかもしれない」

ノスリが模擬刀を取り出した。

「いっちょ、振ってくるかぁ。お前も来るか？」

「うん、あ、はい、お願いしますー!」

子供はツバクロの模擬刀を借りて、二人で昨日の広場に向かった。

\*\*\*

森の奥から剣を振る風切り音と、術の光が洩れてくる。

眉間にシワを寄せて頭を抱えているツバクロに、カワセミが話し掛けた。



「そんなに深く考えなくてもいいんじゃない？」

カワセミは石の一つ一つを確認しながら丁寧に身に付けている。どれもこれもちゃんと意味があるらしい。

「意外と難しいぞ。どうすれば、自然に気がねなく出逢えるんだ？」

「ねえ、さっきのノスリの案だけど…」

「あんなベタベタなのはダメだって言ったのは君だろ」

「いや、あれの変則バージョンでさ、いいカッコしないで、みんなで襲われりゃあいいんだ」

言いながら、懐から黒い毛の入った小袋を取り出す。

「そして、助けて貰うんだ。一石二鳥だろ。狼ってヒトの技を間近に見る事が出来るし、向こうも助けたんなら気がねしなくていい。ボク達は助けて貰ったんだから、お礼を言わなきゃならない。それには、眼前まで行く必要がある。心置きなく」

「……カワセミ、…君、策士だな。頭脳担当代わってくれ  
」女

森の奥の打ち合いの音が途切れ、どちらかが吹っ飛ばされたバキバキという音がした。

「あの重量感は無スリだな…」

「あの子には内緒にしようよ。大好きなヒトを欺かせるの、可



哀想だ」

「ノスリもだ。間違いなく大根だし、緊迫感担当って事で」

「酷え……」

ちょっとワクワクした。

弟子入り前の子供の頃、カワセミと、よく悪巧みをした。ノスリが先頭に立って、悪ガキ三人組で大人達を悩ませたっけ。

一汗かいた二人が、生傷だらけで戻って来た。

剣を交えるとかか通じると言っが、まるで兄弟のように打ち解けている。昨日の今頃が嘘みたいだ。世の中みんなノスリなら本当に平和なのに。二人ともノスリのそういう所には一生かなわないと思って、ある意味尊敬していた。

「お前、太刀筋がいいが、ワンパターンだ。敵はお手本通りの距離ばかり取ってくれんぞ」

「吹っ飛ばされてたじゃん…」

カワセミが意地悪く言った。

「違うの！ ノスリはハンデって言って、片手で相手してくれてたの!!」

子供がムキになって庇う。もうこうなると、ノスリみたいな情の厚い男にとっつて、この子供はうしろのうしろ程可愛くなる。

「俺、術は習ったけど、素の剣は不得意なんだ」

「それはいかん。いつでも術が使えるとは限らん。ついでに、剣もない時の格闘術も教えてやろうか？」

「うん…、あ、はいっ！」

「ところで…君」

ツバクロがかしこまって話し始めた。

「申し訳ないんだけど、僕達、今までの持ち場に用事を残して来ているんだ。こんなに長く待機する事になるとは思っていなかったし。で、一旦それぞれの持ち場に戻ろうと思う」

「え？ だって、長はここで待機していろって」

「臨機応変に、だ。鷹が一番近い者の所へ行くし、手紙が来てから君を迎えに行くよ。君も一旦家に戻れ」

「……俺、一人でこいでいてもいい…」

「おう、それなら俺も一緒にいてやるぞ」

「ノスリィ…ボク、キミがいないと、困る」

カワセミがすり寄るように言う。体力のないカワセミは、本当にノスリがいないと困る事が多い。

「お、おう……」

「俺……」

「君を一人でこんな森に置き去る訳には行かないよ。心配しな

くとも、明日か明後日には迎えに行く」

「……っ？」

子供は午後一杯、新しく出来た兄貴に遊んで…いや、指導して貰う気満々だったので、酷くカッカリ顔だ。ツバクロはちょっと心が痛んだ。

ツバクロが子供を馬の前に乗せ、王都まで送る事にした。

「どちらに送るんだい？ 君の家かい？ それとも…狼の所か…っ？」

カワセミがちらりとこちらを見る。

「狼のバオの前に、俺の青鹿毛を置いて来たんだ。王都の西の森の手前で降ろして欲しい」

ツバクロはカワセミにだけ見えるようにGOOサインをした。

計画の半分は成功したようなモンだ。

「おい、俺達は、ここに来る前にいた湖へ戻るのか？」

「うん、でも、途中まで、一緒に行こうよ。三人で飛ぶのもよく振りだ」

「ん？ ああ…」

三頭は白い森を飛び立った。カンバの白っぽい葉と石灰岩の岩山で、あの辺一帯だけ、緑の草原の中で島のように白い。

「あ、…ねえ、君」

「なに？」

「君の剣、その位置だと、昨日黒虎との格闘で怪我した所に触っちゃうんだ。今だけ剣を外して鞍の後ろに差してもいいかな？」

「あっ…」

子供は慌てて剣を外してツバクロに渡した。

「大丈夫？ 怪我していたの？ ツバクロ」

「いやいや、大した事はないんだよ」

またちょっぴり胸が痛んだ。子供が下手に虎に向かって行かないよう、剣は取り上げておく事にしたのだ。

しばらく飛んで、地平に王都が見えてたちまち広がった。

確か西に、こんもりした森がある。カワセミが目一杯集中して、やっと何かの気配を感じた。

「用心深いな、今まで何度ここを飛んでも気付かなかった訳だ」  
最後尾でこっそり懐から小袋を取り出す。

\*\*\*

「ツバクロ!!、ノスリィ——!!」

カワセミの叫び声が出た。空にいるのに急に影に覆われた。

三頭の馬の真上に、巨大な黒虎が出現したのだ。

「派手過ぎだぜ!! …カワセミ!!」

ツバクロは馬を翻して斜横に逃げた。他の二頭も散ったが、虎は空を走って真っ直ぐにツバクロの馬を追い掛けた。

「こんくらい派手なら、いくら何でも気付くだろう!!」

カワセミはチラと西の森を見やり、虎を追った。

ツバクロは左右に虎を翻弄しながら地上を目指す。

ここまでは想定内だ。しかし想定外の事が起こった。

「ツバクロ、あの虎、俺が目当てなんだ!!」

そう言うが早いか子供は鞍の上に立ち上がり、抱き止めようとするツバクロの腕をすり抜けて、馬の進行方向と逆側に飛び降りてしまった。空中で風を呼んだが、地面に上手く降りられず、「口」「口」転がった。

「あああっ! まずい!!」

あまりの事に、ツバクロもカワセミも泡を喰った。

子供が立ち上がる前に、虎が彼に追い付いた。両前肢を振り上げて、小さい獲物に飛び掛かる。

——ガシィー!!——

ノスリが子供の前に立ちただかって、大刀と小刀で悪魔の鎌のような爪を受け止めていた。

「カワセミ!! 呪文を寄越せ!!」

「あ、うん!!」

カワセミは我に返って、慌てて術を唱えた。ツバクロも馬を返して剣を抜き、虎に向かう。

「—————???!」

視界の端に何か映った?? 少し離れた地平に、昨日の馬…と、隣に誰かいるような…?

———狼?!———

ゆっくりの凝視している暇はない。

ノスリの破邪の剣が虎を吹っ飛ばし、ツバクロもカマイタチを放った。

しかし黒虎は、平氣の平左で立ち上がって来た。昨日の夜の森の、弱っつい分身の虎とは、明らかに違う。

「カ、カワセミ…?」

「ゴメン、本体が来ちまった…」

「マジかよお——?!!」

子供が立ち上がって、叫びながらこちらに駆けて来る。

「ツバクロオ!! 俺の剣…!!」

「来るな! 君は逃げろ!!」

しかし黒虎は子供を見咎めるや、他の三人は目に入らないが如く、執念深く向かって行った。

——ザッシ!!——

隙の出来た虎の肩口から、ノスリの大刀が斬りかかった。しかし鋼の毛皮は、刀を浅く食い込ませただけだった。

大刀は止まって抜けず、弾き返されたノスリに、振り向いた虎が前肢を振り上げた。

「ノスリ!!」

ツバクロがカマイタチを放ったが、虎はのけぞって避け、小刀だけになったノスリに再度襲いかかる。

一瞬を突いて、子供が虎の後ろから、背中を駆け登った。

虎は振り落とそうと暴れるが、子供は肩口の大刀をしっかりと掴んで叫んだ。

「カワセミ!! 呪文!! ・呪文、ちょうだい——!!」

「・・・!!!!」

考えている暇はない。カワセミは自分が吹っ飛ばすほどのフルスロットルで、目一杯の呪文を放った。

大刀の光が緑から白に変わり、子供は束を握った両手に力を込めた。

「——破邪——!!!!」

剣が眩い光を放ち、虎は一刀両断…、肩口から真つ二つに分かれた。

分かれた瞬間ガサガサの破片となってザアッと崩れ、子供は大刀を握ったままその中に落っこちた。

三人の蒼の妖精は、しばし茫然としていた。我に返ったノスリが、子供の落ちた所に駆け寄る。

子供は大の字になって破片の中に伸びていたが、ノスリを見上げて力なく笑った。二人の妖精も来て両方から手を差し伸べ、子供を引っ張り起こした。

ツバクロは地平の人影を振り向いた。カワセミも途中で気付いていた。何で助けに入らなかったんだろう…?

その人影が、馬を引きながらこちらへ歩いて来た。

「……………!!!!……………」

三人は息が止まった。

名前とあの馬の感じから、狼は、年季の入ったごつい剣士か賢者だと思っていたのだ。

その馬を引いて来たのは、子供と同じくらいの背丈の、風柳(かぜやなぎ)みたいな女性だった。カワセミより色の薄い髪を長く編んで、冬空のようななだ色の瞳、真つ白い肌。

…そう、蒼の一族の子供がそのまま大人になったような、淡色の女性……。こんな女性(ヒト)、蒼の里でも見た事ない。

まったく、どの辺が『オオカミ』なんだよ……。三人は何もかも忘れて、ただただ茫然と眺めていた。

「狼……!!」

子供が駆け寄った。

間違はなく彼の言っていた『狼』はこの女性なんだろうけれど……えーと……どうすりゃいいんだ……??? はっきり言って、三人とも女性に対する経験値はゼロに近い。

しかし次の瞬間三人は凍り付いた。

大きく振り上げられた女性の手が、子供の頬をピシヤリと打ったのだ。三人とも自分のはたかれたように目をつぶった。

「虎に付け狙われているというのに、剣を身体から離すなんてもっての他です。貴方は一人しかいないのですよ」

「……ごめんなさい……」

ツバクロはすんごい罪悪感に苛まれた。

女性は更に、虎の残骸を見やりながら凜と続ける。

「随分時間がかかりましたが、やっと倒せましたね。よくやりました。でもこちらの方々の尽力あつての結果です。一人で倒したと思っはいけませんよ」

「は……」

そして空間に糊付けされたように貼り付いている三人の方を

向き直り、深々と頭を下げた。

「こんな未熟な子供ですが、何卒お頼み致します……」

「あ！ は、はいっ……!!」

三人は電気に弾かれたようにキョツケをした。

その狼と呼ばれる女性が、もう一礼して草の馬で飛び去って、しばらくしてから、三人はようやく呼吸が戻った。

子供が真面目な顔で覗き込む。

「ね、『気楽に会える』って感じじゃないでしょ」

三人は乾いた表情で何回も頷いた。

いぶかる子供とノスリを白い森に連れ戻して、ツバクロとカワセミは自分達の企てを白状した。

ノスリは自分が蚊帳の外だったのに不満タラタラだったが、助けがあると油断していた二人より素早く動けたのが功を奏したので、結果オーライって事で治まった。

「助けてくれる訳ないじゃん!」

子供は口を尖らせて言う。

「黒虎は俺が目覚めさせた責任を取って、俺が倒さなきゃいけないって、言われていたんだ」

「目覚めさせた?」

「うん、何方か前、南西の風出流山(かぜいずるやま)で、眠っていたのに騒ぎを起こして怒らせたんだ。それ以来、影に乗って山を降りては、襲いに来る」

「え…? え…?」

ツバクロの影に乗って来たのも、最初からこの子供が目当てだったのか? 単に人間の子供が襲いやすいから、狙いを絞っているんだと思っていた。

「狼に術を持たされて、責任持って被えて言われていたんだけれど、いつも山に返す事しか出来なくて…」

子供は三人を見て犬歯を見せて笑った。

「みんなのお陰で、やっと倒せた」

「……それで、君が命を落こしそうになったら、どうするつもりなんだ?」

ツバクロが真剣な面持ちで質問した。

「そうならないように、普段からしこかれてんじやん」

「だからあ! 今日みたいに、側にいても助けに入らないのか?」

なんだか会話が成立しなくて、カワセもちょっと焦れた。

「???」 助けに入らないのは、俺の力で何とかなる相手だからだろ? 俺に釣り合わない相手なら、初めから狼が出るさ」

「……………」

話が噛み合わないのが、何だか見えて来た。この子供と狼の間には、他の何も介入の余地がない『絶対の信頼』があるんだ。

「キミが本当に追い込まれたら、あれだけの力が出せるって確信していたんだ。何だか羨ましいな…」

カワセミがぼそりと言った。

「ああ、あんな美人なら、ひっぱたかれても側にいたいよな!!」  
ノスリ…………だから、君って、好きだよ…………!!

\*\*\*

時間は少し遡る。西の森、中央の広場。

空から戻った狼は、馬を降りてバオの御簾を開けた。

中にいたヒトがいない? ……と思ったら、床に転がって、カブトムシの幼虫のようにくの字になって、ヒクヒクと痙攣している。

「に…兄様…?」

「ひ…ひ…ク・ル・シ・イ…………」

「……………」

小机の上のビイドロの大皿には清水が張られ、今しがた狼が出逢った三人の蒼の妖精の若者が、呆けているのが映っている。

蒼の長が、小机に片肘を掛けて、やっと起き上がった。来た。

笑い過ぎて呼吸困難で涙を浮かべている。

「兄様…趣味が悪いです……」

「だって…だって、あの子達の貴方を見た時の顔ったら……」

ひ、ひいっく……」

「自分の弟子を、そんな風にオモチャにする長が、何処にいますか?!」

「オモチャになんかしていません!」

蒼の長は長い髪を払ってシャッキリと立ち上がった。

「ただね、あの子達が勝手にオモチャになってくれるんですよ」

……くっくっ……くっくっ……」

また相好そうこうを崩して笑い出した兄に溜め息を付いて、狼はベッドに腰掛けた。

外で鳴き声が出て、鷹が戻って来る。

「御苦労でした。まあ、貴方の出番はないと思っていましたが」

長は腕に来た鷹にトカゲを与え、止まり木に移した。鷹は本当はトカゲよりも虎の心臓が欲しかったのだが。

トルイが弟子入りしたいと言つたのを、長は二つ返事で承知した。基本人間なので油断をしていたが、思った以上に妖精の能力を受け継いでいた。技だけではなく、心の面を一度きちんと教育しなくては…と思っていたのだ。

心配で不安がったのは狼だ。忙しい長を独占する訳にはいかない。必然、他の弟子の子達と一緒にいる。

人間にして、半端に力を持つ子供…、果たして受け入れて貰えるだろうか？

それで『お試し期間』を設けた。トルイが長が一番弟子達に受け入れられなかったら、この話はお流れになる運びだった。勿論トルイにだって内緒だ。

「心配要りませんよ。みな本当にいい子達です」

長はそう言つて妹に大皿を用意させ、水を張つて術を施し、鷹の目を通して参観させたのだ。

一日目……。

黒虎が現れたのは予想外だった。

トルイに術は持たせていたので心配はなかったが、三人の弟子が子供を警戒する結果になってしまつて、ハラハラした。

水鏡に映る、焚き火を囲む面々… 声を聞く事は出来ないが、会話は成立しているようだ。

何でかトルイが泣き出してびっくりしたが、他の二人が宥めてくれているようでほっとした。

長の予想通り、カワセミが弾けた事をしてかした。

「ね、あの子、面白いでしょ」

嬉しそうに「ニコニコ眺める兄に、本当にトルイの為だけなのかしら……?と、狼は呆れた目を向けた。

水鏡は、声が聞き取れないが、表情で四人がだんだん打ち解けて行くのが分かった。今朝は、ノスリがトルイに剣の稽古をつけてくれるまでだった。

一族と縁を切ってしまったっている身の狼は、トルイが蒼の妖精の青年と嬉しそうに過ごす様子に、何とも言えない感慨を覚え

た。  
しかし残った二人の様子がちょっと変だ。小袋の中を覗き込んで、何やら算段している。

「……?……何を相談しているんでしょ?」

「はぁん……子供の頃の顔に戻っていますね。何か企んでいます」  
程なく、四人は馬に乗ってこちらへ向かって来た。

「……? 監視がバシたんでしょ?」

「……いや、多分、話の中で、貴方に興味を持ったんでしょ?。」

まっすべこちらへ来ますよ。おや、カワセミが懐から何か取り出しましたねえ。黒虎の毛……? はぁん……、昨日と同じ方法

で貴方をおびき出すつもりで……あらうらうら……本体が来ちゃいま

したよお

「……?」

狼は外へ飛び出しかけた。その後を長の言葉が追う。  
「行くんなら、ちょっとお願いがあるんですが……」

狼は長に言われた通り、トルイにだけ接して、三人の青年は、おむね無視した。呆気に取られた三人の顔が、長の大爆笑を取ったのだ。

「性格ワル……」

「いや、あの三人は女性に対してまったく免疫がなくてねえ。

ツバク口なんかはある程度モテるんだけど、どこ吹く風で……」

長は本当に弟子達の事を樂しげに話す。

「兄様の爆笑を取る為に、ワタシに無視させたんですか?」

本当なら、身体を張ってトルイを庇ってくれたノスリなんか、抱きしめて礼を言いたい位だった。

「いいえ、違いますよ」

長は努めてシャキツとして、狼に向き直った。

「貴方には、あの三人にとって『孤高の存在』になって貰います」

「え……?」

「あの年頃の男の子には、そういうのが必要なんです。現状に満足して立ち止まらない為に」



「はあ……」

「今後、もし会う事があっても、毅然としていて下さい」

「そういう役目は兄様の方がいいんじゃないやありませんか？」

「嫌ですよ、疲れるから」

「……………」

「私は、優しくして、のほほんとしたオジサンでいます。楽だから」

「……………」

「……………」

「貴方も、蒼の一族の事、私に任せきりで、ちょっとは引け目を感じているんなら、それ位は引き受けて下さい」

「……………」

「何だかトルイの弟子入りにかこつけて、乗せられたような気がする……」

「それにしても…… 長はまた、笑みが込み上げて来る。

自分の妹は、こんなにも目も醒めるほど美しいのに、本人は全く知らないのだ。だって、彼女を見られる者が殆ど皆無の環境で成長し、唯一の大人の男があつた唐変木だ。

実はこの妹を自慢したくて仕方がなかつたのだ。予想以上の反応をしてくれて、長は大いに満足だった。

「まあ、でも、今回のお試し期間をやったお陰で、予想外の収

穫もありました」

「……………」

長はもう一度水鏡を覗き、愛弟子達をいとおしげに見つめる。

「杓子定規で優柔不断だったツバクロ…… 自分の事だけで精一杯だった力ワセミ…… 物事を早合点しがちなノスリ…… あの子

達の一番の欠点を自覚させ、克服の糸口に誘いざないました。大した子供ですよ、貴方の息子は」

「……………」

「……………」

「では……………」

長は水鏡の術を解き、鷹を伴い、伸びをしながら外へ向かった。

「里へ戻ります。参観ももう要りませんね。もう一晩、彼らには親交を温めて貰って、明日迎えに行きましょう」

「あ、兄様!!」

「はい？」

「あの子の事、宜しく、お頼みします」

狼は深々と頭を下げた。

「大丈夫ですよ。さっきも言ったけれど、子供達は大人の想像外でどんどん成長します。貴方も……………」

長は鬮牙の馬にひらりと跨がった。

「貴方も…たまに帰って来ていいんですよ。掟は皆を幸せにする為にあるんです。少なくとも、あの子達は、迎えてくれますよ」

「……………」

鬮牙の馬は地を蹴り、ゆっくり上昇してから北の方向にひゅんと消えた。

狼は、あの日天の川の下で別れた、幼い妹の顔になって、それを見送っていた。

\*\*\*

満天の星だ。

白い森の四人は焚き火を離れ、地面に仰向けに寝転んで星を眺めていた。でも話しているのは三人だ。ノスリはさっきから軽いイビキをかいている。

「兄貴が出来たみたい…」

子供は顔を横に向けて、午後一杯、剣の稽古を付けてくれた兄弟子を、嬉しそうに見つめた。

「キミ、一人っ子なの？」

カワセミがノスリの顔の生傷に軽く呪文を施しながら聞いた。

「腹違いの兄弟は一杯いるよ。親父、奥方が山ほごいるし。で

も、誰とも、あんま話した事ない。ほら、俺、こんな見テクしだし」

二人がちよっとリアクションに困った風だったので、子供はこの話は言い切ってしまう事にした。

「この髪や眼の色はねえ… 長が言うには『呪い』らしいんだけれど…。俺はそこそこ気に入ってる。だからいいんだ」

「うん、見馴れると、それがキミたる由縁…って、思えて来るねえ」

カワセミが言うと、ホントにそんな気がしてくる。

「君のお母さん…は、……………狼…？」

ツバクロが、努めてあっさり聞いた。

「…うん」

「そうか…」

蒼の里を出奔したという『狼』が、この子の血縁だろうと、何となく気付いていた。人間の將軍の父親とどういう縁が？と思っていたが、狼が女性だった事で合点が行った。

「あんなおっかないヒトを守るようになるつもりなんだ」

「うん」

「遠い道のりだね」

「うん…」

カワセミが星を指差して繋げながら言う。

「長はさあ、あの女性の事、ホくらにも内緒にして、しょっちゅう逢いに行っていたんだあ。ちえっちえっちえ——っ……だよね」

ツバクロも頭の後ろで手を組んで、繋げた星を眺める。

「いつの間に……って感じだよな。長があちこちから持ち上がる縁談、のらりくらり代わしてるの、そういう理由があ。まあ、あんなキレイなヒトがいたんじゃねえ」

「あ……」

「ああ、悪い。子供の前で言う話じゃないよね」

ツバクロが話を切って苦笑した。

子供は言いかけた事を飲み込んで、別の話題にすり替えた。

「そんな、キレイ？ 母さん」

「キレイだよお。蒼の里でも十人中十一人が振り向くよ」

カワセミが髪をかき上げて言う。

「ふうん、キレイなんだ……」

子供は、馬を誉められた時と同じような感じで呟いた。

「俺だけがキレイって思ってると思ってた。親父はそんな事ひとっ言も言わないし」

「ああ、男ってそう。特に人間の男は……」

カワセミがもう一度髪をかきあげて、知った風な口振りで言うので、ツバクロも再び苦笑した。

「ふう、くっ付けちまおうか……。長と君の母さん。僕達で画策っつ」

「ダメ、ダメ」

子供は、どうにも隠しておけなくて、黙っていたように思っていた事を言ってしまった。

「母さんは親父にぞっこんなの！ 第一、長が逢いに来るのは、大事な妹が親父にそんざいに扱われていないか、心配でしょうがないからで……」

「……」

「……」

二人の妖精が目を丸くして息が止まるのが分かった。やっぱり驚かしちゃう事だったか。

「い、いもうと……?」

「長、妹がいたの……?」

いや、子供の頃妹がいて……なんて話は聞いた覚えがある。古い大人もその話に触れないから、てっきり幼くして亡くなったのだと思っていた。

「長の血筋……」

カワセミが乾いた声で呟いた。

「長の血を持つ能力者が極端に不足しているから、今の長は大変な苦勞をしているんだ。貴重な血筋を持ちながら、人間に懸想して、里を出奔したっていうのか。長がどれだけ苦勞しているか……」

「カワセミ、この子に言う事じゃないよ！」

ツバクロが慌てて制止するが、彼も上ずっている。子供は立ち上がったしまった。

「ごめん、やっぱり言わない方がいい事だったんだ……」

ツバクロが焦ってその場を繕おうとした。

「君の…君の、お母さん、蒼の里に戻る気はないの？ 例えば、お父さんが亡くなった後とか。きっと歓迎されるよ。寂しくなくなると思うよ」

「歓迎？ 母さんを？ 母さんの血を？ 掟はどうしたの？

…そんなの、余計寂しいと思う。だから里を出たんだと思う。母さんが里を出たの、今の俺よりずっと小さい、子供の頃だったんだ」

二人とも黙った。言わない方がいい事を言ってしまったのは、自分達の方だというのが分かった。

「ごめん……俺…頭、冷やして来る……」

子供は岩山の方へ駆けて行ってしまった。残された二人は、無言でうつむいた。

「お前ら、ハカヤローだ!!」

振り向くと、いつの間に、ノスリが起きていた。

「お前らは理屈で物考え過ぎるんだ。俺が行く。お前ら、お子ちゃまのご機嫌取りに、甘いお茶でも沸かして待ってろ」

ノスリはずんずん岩山を登って行った。ツバクロは下を向いてしまったが、カワセミは何故か上を見ていた。

「…あ……………」

小さく口を開く。

\*\*\*

岩山の上で、子供は膝を抱えていた。

二人は好きだけれど、好きなヒトと分かり合えないのは、そうじゃない奴に分かって貰えないより、ずうっと辛い。

子供は生まれてこの方、そんな経験がなかった。好きなヒトがあんまりいなかったのだ。

いつの間にかノスリが脇にいた。

「俺はお前が羨ましいぞ」

「……………」

「今の長の弟子達は、喉から手が出るほど欲しいんだ。長の血

の資質が」

「……………」

「俺達三人な、昔、長に弟子入り志願した時、親や教師には反対されたんだ。あんな血じゃ、修行する価値もないって」

「え……………」

子供は顔を上げてノスリを見た。

「長は、血の区別なく、やる気のある者を受け入れてくれた。

その代わり、他の者が七年かけて卒業する修練所を、四年で収めた。昼間、正規の授業を受けて、夜中までいっこ上の勉強をするんだ。次の年、一〇飛び越したクラスに入る。とにかく一年でも早く長の元へ行きたかったんだ。寝ている暇もなかったが、ツバクロは年上の子に混じって、ずっと主席だったぞ」

「……………」

「修行に出るからも、どんなに頑張っても出来ない事がある。

長は出来る事だけ伸ばせばいい、と言ってくれた。最初、カワセミが、一番何の取り柄もなかったんだ。身体が弱くて、物覚えも悪い……」

「まさか……」

「脱落するだろうと、誰もが思った。でも長だけは思わなかった。根気良く内の眼を開く訓練をした。長だけはカワセミの本

当を解っていてくれた。だから、奴にとって長は絶対なんだ。

奴が長中心の言い方になるのは許してやってくれ」

「あ、……うん……」

ノスリは一息ついて、もう一度子供に向き直った。

「俺達、お前のお袋さんの寂しさを分かっとらん。でも、それと同じ位、お前も長の大変さを分かっているんじゃないか？」  
その言葉は子供の胸に突き刺さった。たまに母親のバオに来て、のんびり雑談して帰る長しか知らなかった。

「……………そうかも……」

「俺ら、早くいっちょ前になって、長を助きたい一心でこまで来た。今のお前もそうなんだろう？」

「ノスリ……」

「俺らがちゃんと分かり合う事は、長と、…お前のお袋さんの為になるんじゃないか……? と思えるんだ」

「……………うん……」

「だけどピンタは嫌だ」

子供は下を向いて笑った。

上に目線を戻すと、ツバクロとカワセミが星空を背景に歩いて来る。ツバクロは熱いポットを、カワセミは暖めたカップを

四つ持っている。

「もうじき月が昇るからねえ。天の川が見えなくなる…」

カワセミが皆にカップを配りながらポツリと呟いた。

「天の川、見えるうちに話したかった」

子供にカップを手渡し、水色の長い髪を揺らして横に座る。

「昔、修行が嫌になって、逃げ出した事、思い出したんだ…」

そう話し出すカワセミの横顔は、今までの隙のない感じじゃなく、少し危うげだった。

「いつまでたっても何にも出来なくてさ。何回も逃げ出した。

根性無しでさ。そのたんびに長が追い掛けて来て連れ戻すんだ。

もう放つと言って言っても」

「……今のカワセミからは想像つかない…」

「うん。いっぺん、長と凄いい合いになって、…天の川のきれいな晩だった。ボクが、辛いコトとか全部吐き出し終わって

…。長は自分の昔の事、話し出したんだ」

子供だけでなく、他の二人も顔を上げた。初めて聞く話だ。

「何も出来ないって、見捨ててしまったヒトがいるって…。出

来なくても、いるだけで構わないからと放って置いて、寂しい思いをさせている事に気付かなかった。そのヒトはうんと遠くへ行ってしまうって…二度と自分の元には戻らなくなってしまう

た。そして今も寂しい目をしている。誰にも二度とそんな思いをさせたくないって…」

ツバクロもノスリも、長のそんな心の内…、知らなかった。

でも、色んな事が思い当たった…。

「ボクがここまでなれたの、そのヒトの存在があつてのモノだと思つ」

子供はマジマジとカワセミを見た。水色の瞳が霞の様な星々を映している。

「さっき、それを思い出したんだ。そのヒトと別れたのも、天の川のきれいな夜だったって…」

中天の天の川は数え切れない星々が重なり、勿体ない程美しいのに、何でこんなに寂しく見えるんだろう…？

熱い馬乳酒をすすりながら、四人並んで、薄ら明るくなる地平を、じっと眺めていた。

「月が昇ったら、命名の儀式をしようか……………」

\*\*\*

「起ーきーろー—!!」

やっぱり子供は寝過ぎしてしまった。ノスリに毛布ごとひっくり返される。洞穴から転がり出ると、ツバクロは焚き火を起こし、カワセミは朝の修練に行く所だった。



「来い…、キミ、修行次第で、何処までか、イケるかもしれない  
さ…」

「うん、あ、はい!!」

滑るように歩くカワセミの後ろを、子供はバタバタと着いて  
行った。

湯を沸かすツバクロの横で、軽く素振りをしながら、ノスリ  
が話しかける。

「最初、俺、長があの子を跡継ぎ候補に考えているんじゃないっ  
て思ってた、結構びびった」

「ん、僕も。人間だし、まさかね…って思ったけれど。あのヒ  
ト、慣例よりも実質主義で、飄々といろんな事を改革して来た  
から…」

「奴はそんな気、毛頭ないみたいだな。でも、俺、能力があ  
るんなら、あいつと肩を並べてもいいって気になってる。あ  
いつは…俺は好きだ」

「僕も好きだよ」

「そうですね。それはよかったです…」

木々がざわめいて、風と共に声でした。

振り向くと、長い群青色の髪を揺らして、涼しげな顔の蒼の

長が、愛馬と共に立っていた。

「・お・さ・…!!」

「直接来られたんですか?!」

蒼の長はいそいそと、二人の側に来て腰を降ろした。

「早く貴方達に逢いたくって、早起きして来ちゃいました。何  
か飲ませて下さい」

「あ、あの…」

「ああ、最初に言っておきますが、あの子を蒼の長に据える気  
はありません。いくら私でもそこまで吹っ飛んでいません。だ  
いいち貴方達がいるのにお茶くださいな。喉がカラカラです」

「は…はい…!」

ツバクロは慌ててカップに紅茶を注いで、長に渡した。

「長、だけど、アイツなかなかのタマだ。人間の將軍にしとく  
の、勿体ないですぜ」

「ふふふ、ノスリ、その点は私と同意見ですね。まあ、將軍は  
経るかもしれませんが、あの子の落ち着き先は、彼の父親と話  
が着いているんですよ。あちち…」

「は…はあ…」

長の人脈って…??

「彼にはまだ言っていないませんが、北の草原台地の領士の席です。



蒼の里のある所ですね。貴方達と、彼と、仲良く平和に治めて  
いって下さいね」

「……………」

二人は唾然と口を開けた。最初からバズルのようにピッタリ  
はめ合わされるようになっていたんだ。

「その為に、引き寄せたんですか？」

「ん？ ああ、まあ、それでもあります。仲良くなってくれて  
よかったです」

長は澄まして紅茶をすすった。

「あの……長……」

ツバク口がそおっと切り出した。

「僕達、…妹君にお逢いしました。王都の側で……」

長は急にそっぽを向いた。肩を震わせている。

言い付けに背いて王都に行った事を怒っているのか、妹の事  
を想って涙を堪えているのか……。

実は、涙を堪えて、思い出し笑いを噛みしめているのだが…。

「そうですか……」

長はやっと振り向いた。目がうるうるしている。

「で、どうでした？」

「え……っ？」

「私の妹に逢ってどう思いました？」

「え…ああ、キレイな方だと……」

「私が隠していたの、気になりますか？」

「あ、はあ、まあ……」

「すみません。強いて隠すつもりなかったんですが、里を出た  
子ですし、話す切っ掛けがありませんでした。今が丁度よいタ  
イミングだったという事です。そう思いませんか？」

「ああ…はい……」

「ノスリはどうでした？」

「キレイだけど凶暴でした。いきなりビンタだし」

「ノスリ！」

「誰が凶暴なの？」

カワセミがまた上半身裸のズブ濡れで戻って来た。

後ろからやっぱり上半身裸の子供が着いて来るが、こちらは  
真っ青で、歯の根も合わないくらいガチガチ言っている。

「おやおや」

「あ、長……」

「ちゃんと修練は欠かしていませんね、エライエライ」

長は立ち上がって、カワセミの濡れた頭をくしゃくしゃ撫で  
た。

子供は目が眩んでいるようで、フラフラと焚き火の側に倒れ込んだ。背中に真っ赤なタテガミがあるのだが、三人は黙って受け流している。長は目を細めた。

「初めてにしては頑張ったよ。おーい、起きろ、長が見えているぞ」

「お…長、ふにゃ……」

子供はしゃんとしようともがくが、力が抜けて立ちあがれない。カッコ悪い弟子入りだ。

「先行き不安ですね。名前は貰えたんですか？」

「ああ……」

三人は顔を見合わせて子供を見た。まだせえせえ言っている。

「ほらガンバシ、名前ってのは自分で名乗るモンだろ」

ツバクロが屈み込んで子供を支えた。

「キ…キビタキ………」

「ほお……」

長は三人を見回した。蒼の里で鳥の名前を貰ったのは、この三人だけだった。三人はそれを誇りにしている。しかも三人にとって、キビタキというのは特別な鳥だ。彼は相当気に入って貰えたらしい。

「おや…?!」

長が森の入り口を見やった。

「——???!」

三人同時に電気が走ったように飛び上がった。森の入り口に、気配もなく人影が現れたのだ。

人影の後ろに控えているのは、あの立派な草の馬。逆光のこちらへ歩いて来るヒトは、木陰に入っようやく表情が見えた。

堅い面持ちの、空色の髪の女性、…狼……。昨日はローブ姿だったが、今日は真白い甲冑を身に付けている。

「かっけえー……」

ノスリが息を吐きながら呟いた。

「どうしたのですか？ 見送りにしてはその出で立ち？」

狼は真っ直ぐ長の前に行き、頭を下げた。

「長、申し訳ありません」

\*\*\*

「遠征が早まったのです。大陸で急な動きがあつて」

「それは…まだ…」

「急ぎ出立しなくてはなりません。トルイも、父親に着いて…」

「ああ…そうですか…それは…仕方ありませんね。今回の弟子

入りは見送りにしましょう。…残念です」

「すみません… トルイは…?」

ここで初めて女性は、地べたで伸びている我が子を発見した。

「…トルイ! 長の御前で!」

「わあ! 待って、待って!!」

呆然と二人の会話を聞いていた三人は、弾かれたように子供の前に立ちほだかった。

「ボクが、ちょっと、シコキ過ぎたの! 無理ないんです」

「まだ馴れていないんです。ピンタは勘弁してやって下さい!」

「昨日から飛ばし過ぎたんだ! こっちは三人交代だけだ…」

俺ら、弟弟子が出来て、つい、嬉しくて…」

「……………」

女性は何とも言い難い表情で、三人を見つめた。目と口の端をブルブル震わせて、懸命に何かを抑えているようだ。自分達にもピンタが飛んで来るのではと、三人は身を固くした。

ピンタは飛んで来なかった。子供が目を覚ましたので、そろそろに気が行ったのだ。

「ふわ…………? 狼? あれ? どうして?」

ノスリが立ち上がろうとする子供を引っ張り上げてやった。

「遠征が早まったのです。貴方も急遽城へ戻り、王と合流する

ように。出陣に際して、初陣の皇子が不在では示がつきませぬ」

「は、はい!!」

子供は今の言葉で喝が入ったのか、千鳥足ながらも身支度を整え出した。

三人はというと、女性が今言った言葉の中身に気付いた順番に、凍り付いている。

長が改めて女性の側に来た。

「本当に残念です。皇子として世間に認識されると、そうそう自由もなくなるし、今回がよい機会だったのに」

「はい、でも、大陸から帰ったら…何ヶ月、もしかして何年か後になるかもしれませんが…またお頼みします」

「ええ。貴方も病み上がりなんだから、無理しちゃイケませんよ…」

女性はちょっとだけ目をしばたいた。

子供が何とか準備を済ませ、三人の前に立った。

「カワセミ、さっき教わった事、俺、毎日やるよ。ノスリ、ちゃんと素の剣の稽古を積むから、次に逢った時は、両手で相手をしてくれよな。ツバク口…、ツバク口が最初から庇ってくれたから、俺、ここにいられた。…アリガト…」

「あ、あの…!!」

ツバクロが意を決したように顔を上げて、狼の前に進み出た。

「出陣式と…その後、大陸の陣に居ればいいんですよね!!」

「……………」

女性は固まった表情でツバクロを見つめている。

ピンタされるかもしれない。しかしここはピンタのひとつぶたつ受ける覚悟だ。

「大陸までの移動に、結構な日数が掛かるでしょう? このタイムラグに、予定通り蒼の里で修行出来ます!!」

「ほお…そして、その後は…」

長が口を挟んだ。

「僕が陣まで送ります。僕が風を読んだら、どんな草の馬よりも何倍も速い。長もご存知でしょう? だから、…………えと、この国を出て、大陸まで飛ぶ許可を…ください…」

「順序が逆でしたね。まあ良いでしょう!」

長は女性に向き直った。

「…と…言…事…です。と…つ…ですか? このツバクロなら、二人乗りでも大陸の峯まで、半日かからず飛べます!」

「……………」

女性はまだ黙って微動だにしない。

「狼…? 狼、お願い。俺、もっと、教わる事がある!」

子供が女性の手首を握る。

女性は目線を臥せたまま、ツバクロに頭を下げた。

「…よろしく…お頼み致します…」

「あつ…そっ、いえっ…………」

狼は慌てるツバクロにくるりと背を向け、馬の方へ歩き出した。

「…トルイ、その方に感謝なさい。心から、感謝しなさい…………

行きますよ…」

「は、は…!!」

子供は千鳥ながら女性の後に続いた。

「ここで待っていますよ。式典なんて面倒なモノ、チャッチャと済ませて早く来て下さいね!」

長の言葉に一礼して、女性は子供を乗せて飛び立った。

あの子…いろんなモノをこらえるのに、いっぱいいっぱいでしたねえ… 長は口の端でほくそ笑んだ。

「お…さあ…!!」

振り向くと、三人の愛弟子が、折り重なってジト見している。

「キビタキの父親が、あのモンゴルの大王なんて、聞いていませんよお——!!」

「あのガキンチョ、皇子サマかよお〜!!」

「あのヒト…大王の妃なんだ。玉の輿じゃん……」

「まあまあ…、丁度、時間も出来ました。ちょっと座りまじょうか。ノスリ、焚き火が消えそですよ。ツバクロ、紅茶が冷めちゃいました、入れ直して下さい。カワセミ……」

長はまだ上半身裸のままの弟子に、上衣を掛けてやりながら言った。

「あの子は妃ではありませんよ。王の為に子供を一人生んだけれど、…それだけです…」

ちょっと声が沈んだ。

\*\*\*

四つのカップに紅茶が行き渡り、長はとつとつと話し始めた。

「…むかしむかし……血筋は良いけれど、何にも出来ない子がいました…。何も出来ないけれど、血筋が良いので、周りに何も求められていませんでした」

三人とも、紅茶カップを両手で抱えて、黙って長を見ている。

弟子入りして長といえる事は多かつたけれど、こんな静かな、深い水の底のような話し方の長は、初めてかもしれない。

「その頃のこの国は、前の大王が亡くなり、混沌としていました。人間が荒れると人外世界も荒れます。蒼の里も、今とは比べ物にならない程殺伐として、他種族との争いで、大勢命を落としたりしていました。そういう歴史は、学びましたね」

三人は黙って頷く。

「そんな折り…その何にも出来ない子は、一人の人間の奴隷の少年と出逢いました。手足を鎖で繋がれているのに、誇りを失わない、燃えるような目をした少年でした。子供は気付いたんです。この少年こそ、混沌とした時代に夜明けを連れて来るハーンになると。何にも出来ない自分は、この少年を助ける事によって、何か出来るようになるんじゃないかと」

「……………」

三人とも黙って聞いている。カワセミのカップが傾いて、紅茶が糸のように地面に垂れているのに、誰も気付かない。

「そうして子供は、天の川のきれいな夜、自分で決意して、生まれ育った里を出ました。私は……………」

長は止まって、長く間が開いた。三人は長の方を見られなかった。

「…名前を与え、大人として認めて……………黙って彼女を見送りました」

しばらく沈黙があった。

「まあ、そう言った所です」

長が顔を上げて、焚き火に薪を投げ入れた。三人も顔を上げて、ぬるくなった紅茶をすすった。

「里を出てから、十数年音沙汰なしです。ひどいですよね。こっちは寝ても覚めても心配していたのに。挙げ句の果てには、彼の子供を身籠ったって…、こっちは産婆さんの手配やらで大わらわです。あ、ちなみにトル…キヒタキを取り挙げたのは、オタネお婆さんです。その後はちよくちよく会うようになりましたが、今度は会う度に育虎相談です。そして今回の弟子入り。やっと繋がりましたね。大分、端折はしよったけれど、理解して貰えましたか？」

「は………はい……」

三人はまた紅茶をすすった。しかしカップは空に近かった。

「では、質問コーナーです。聞きたい事はありますか？」

三人は顔を見合せたが、まずノスリが手を上げた。

「何も出来ないつつたけど、凄いいヒトに見えた…です……」

「ああ、戦場で独自に修練して、実戦で鍛えられたようです。里については彼処までは成れなかつたでしょう。信念を持った確たる目的があるという事が、どれだけのモノか、皆さんも覚え

て置きましょう。まあ、剣で闘いたくはありませんね。貴方達も下手に怒らせちゃ駄目ですよ」

ノスリは肩をすくめた。

「んじゃ、ボク……」

カワセミが手を上げる。

「あのヒト…里には戻らないのですか？ その…助けるべき人間がいなくなつた後…とか」

「そうですね…私はしよつちゆう帰つて来るよう言っているんですがね……」

昨日、この質問はキヒタキを追い詰めてしまった。でも、長の考えは聞いて置きたい。

「あの子は、王君が寿命を終える…その最後の一息まで、側にいるのでしょうか。その後の事は考えられないんじゃないでしょうか。誰だって、自分が死んだ後どうなるかとか考えて生きていないでしょうか？」

「……………」

答えになっていない…。でも、これが答えなんだろう。

「ツバクロは？ 質問はないんですか？」

「あ、ああ、僕の気になっていた事は、カワセミが聞いてくれたから。でも、この際、聞いていいんなら……」

「この際、何でもござりさ」

「長はどうして、ご自身の血を残そうとしないんですか？ 何だかんだで縁談、蹴りっ放しで」

長は飲みかけていた紅茶をむせた。そう来るとは思わなかった。しかし質問を受け付けたからには答えねばなるまい…。

「その…ね……」

前髪を顔に掛けて、少しうつむいた。

「しんどかったんですよ、結構ね…」

「へっへっ」

三人は喉をゴクンと鳴らした。このヒトが自分達に対して、しんどいなんて言葉を口にするなんて、夢にも思っていないかったのだ。

「前の長が偉大なヒトでねえ…。周囲の期待も甚大で…。妹もおんなじブレッシャーで成長止めちゃうし…」

いつもの澁みなく喋る感じが失せて、しどろもどろだ。

「もう、あんな辛い思いする子供、作りたくない…って思っちゃうんです。…どうもね……」

「……………」

「貴方達がいてくれるから、いいんです」

長はそう言って、冷めた紅茶を飲み干した。

木々がざわめき、女性がキビタキを伴って戻って来た。

長と一言三言、言葉を交わし、皆に深々と頭を下げて、王の元へ去って行った。

キビタキは嬉しそうに母親に手を振り、改めて長に挨拶する。

「城と…逆方向へ行かれましたね」

「一足先に大陸へ出向き、地盤を整える作業をするのですよ。」

「この国が安泰なの、結構あの子が貢献しているんですよ」

「へ…え…」

「ツバクロ、この子を送りついでに、ちょっと弟子入りして来たらどうです」

「へっ…いや…いや、いいです!!」

「『蒼の狼』の後は俺が継ぐの！ すぐにその仕事も俺が助けられるようになってみせるさー！」

子供が胸を張って息巻いた。

「この子供は確かに何かを壊した。」

若者達の卵の殻と、大人の心の壁。

三人は思う。この子供と一緒に未来を作って行こう。

そうする事で、寂しい大人達の負担が、ちよつとづつでも減ればいい。

自分達が心置きない存在になれば、長も家庭を持ち、あの女性が自分を責める事もなくなるんじゃないだろうか。

寂しい天の川も、明るい月と共に空にあれば、そこにちゃんとおるけれど、寂しさは霞たで行くんじゃないかと……。

〜おしまい〜

二〇〇九・八・某